

記念号発刊にあたって

史学科主任 割 田 聖 史

本号は、二〇二五年三月をもって青山学院大学を退職される北村優季教授の退任記念号となります。

北村先生は、一九五六年、三重県にお生まれになり、一九七五年に東京大学文科三類入学、卒業後は一九八一年に東京大学大学院人文科学研究所国史学専攻修士課程に進学され、一九八三年に博士課程に進まれました。一九八五年、博士課程を退学し、同年四月に山形大学文学部に専任講師として着任されました。一九八九年には同大学助教授、二〇〇二年二月には教授へと昇任されました。二〇〇二年四月から青山学院大学に教授として着任され、現在に至っています。二〇一二年から二〇一四年まで、史学科主任・専攻科主任、二〇一六年から二〇一八年、二〇二一年から二〇二三まで、大学協議会委員の要職を務められました。また、この間は、大学が大きく変化していく時期でしたが、史学科を代表して自己点検評価委員も長く務められ、大学評価に関して大変お骨折りになされました。

北村先生は、青山学院大学に移られてから二十三年に渡り、日本古代史に関心を持つ学生の指導をなされてきました。先生の人当たりの柔らかさと同時に、学問的・精神的な芯の強さで、多くの学生に古代史研究の神髄に触れさせたことと思います。

研究者としての北村先生のご専門は日本古代史であることは言うまでもありません。その中でも特に平城京、平安京の都市史研究を専門とされています。『平安京―その歴史と構造―』（吉川弘文館、一九九五年）、『平安京の災害史―都市の危機と再生―』（吉川弘文館、二〇一二年）、『平城京成立史論』（吉川弘文館、二〇一三年）の

三冊のご著書をはじめとして、古代都市史に関して多数のご論考を発表されています。また、『平城京成立史論』は、二〇一五年度の青山学院学術賞を受賞しておられます。

『平安京の災害史』に関しては、私が二〇一二年に青山学院に赴任した際に最初にご恵贈いただいた書籍であり、非常に印象深い一冊です。本書は、日本古代の平安京におけるさまざまな災害と「災害に向き合った日本人」を扱ったものですが、古代の災害に対する人々の姿と、東日本大震災が大きな爪痕を残していた二〇一二年当時の状況とが、「二重写し」のように目の前に突き付けられているような感覚を持ちました、日本の古代の話ではあるはずですが、北村先生の描く歴史のアクチュアリティに強く感銘を受け、ベネデット・クローチエやE・H・カーの「すべての歴史は現代史である」という有名な言葉の実践例がここにあると感じたのを覚えています。

北村先生は、近年は古代都市史だけでなく、三重県鳥羽市神島かみしまの研究に従事されており、数本の論考とそれらを基にしたご著書『神島の歴史と空間―日本の原風景―』（名著出版、二〇二二年）を刊行されました。神島は伊勢湾に浮かぶ孤島であり、従来の北村先生の研究対象とは大きく異なっています。対象の性格は都市から漁村へ、対象時期も古代から近世へと、北村先生がその視野を今現在でもさらに広げていることが分かります。

最近では史学科の「長老」として、さまざまなアドバイスをいただいている北村先生ですが、ご退職の後には退職者の中では「最若手」となられます。まだまだお元気で活躍していただけることを心から願っています。ありがとうございます。史学科一同、心よりの感謝を申し上げます。